

# 日商簿記 1 級&全経上級ダウンロード講座

## 工原 No.12【標準原価計算の仕損・減損（配合差異と歩留差異）】

収録日：平成 25 年 9 月 1 日

### 【出題実績】

日商簿記 1 級 132 回

全経簿記上級 153 回

	検定簿記講義	サク	スッキリ	教科書
ページ数	6	17	17	
配合差異と歩留差異	◎	◎	◎	
加重平均標準価格	◎	×	△	
労働能率差異と歩留差異	△	◎	◎	
人員構成差異	×	×	×	

◎説明あり、例題あり ○説明あり、例題弱い、△説明弱い、例題あり、×説明弱い、例題弱い  
（「弱い」は「ない」を含みます）

●他の箇所では説明又は例題あり

標準原価計算のヤマ場といわれている論点ですが、「標準投入量」という意味をしっかりと把握しておけば何とか対応できます。

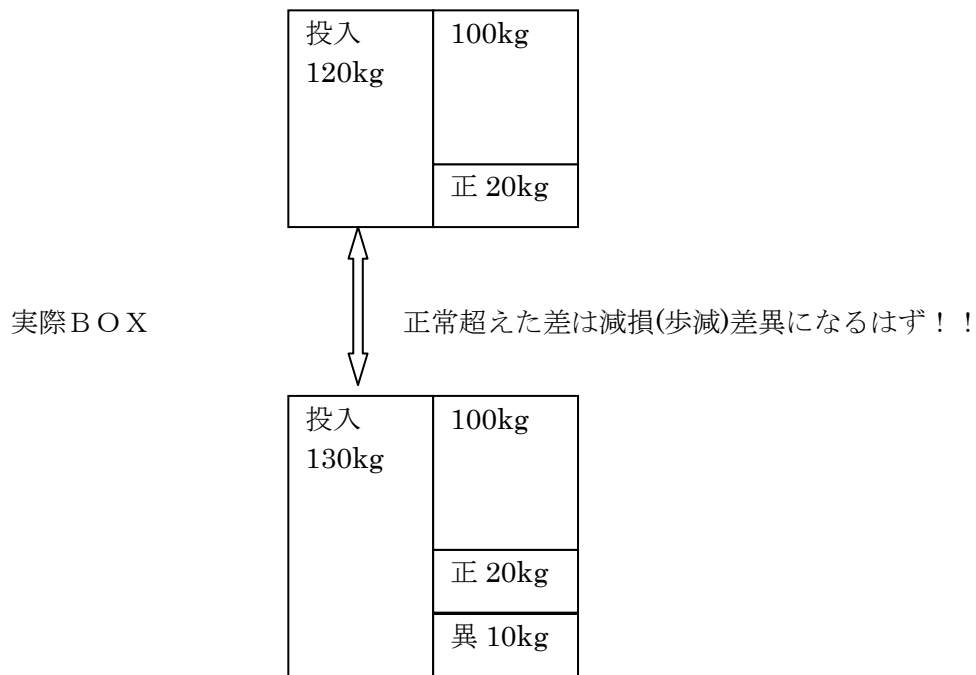
実務的には、1つの材料や1人の担当が製造をまかされている訳ではなく、複数材料を複数人で担当するので、差異分析の考え方の応用論点という意味で対応できるようにして下さい。

予算実績差異分析にもつながる重要概念です。しっかりと学習して下さい。

## 配合差異と歩留差異

<div style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">{</div>	標準投入量に対しての標準使用量や標準時間	問題から読み取る事が大事
	実際投入量に対しての標準使用量や標準時間	
	実際投入量に対しての実際使用量や実際時間	

標準BOX（正常仕損は許される）



加工を加えた材料が仕損になったら、再加工しなければならない。

この図でいうと、10Kg 余計に投入したら労務費や間接費も標準よりかかる

異常な差異を歩留が悪かった原因の差異とし、残りを「別管理する」ととらえる考え方が必要

こんなイメージです

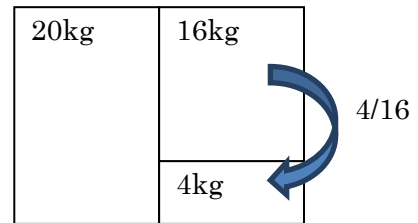
<例題>

①下図で説明します

A : 標準@7×15kg=105 } @60円の直接工の5時間の作業で完成  
 B : 標準@5×5kg=25 }  
 合計 130円

16kg 完成(4kg 減損)

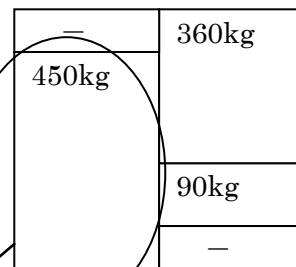
投入量 1Kg あたり 6.5 円の材料費かかる  
 投入量 1Kg に A は 15/20 (0.75) kg  
 B は 5/20 (0.25) kg



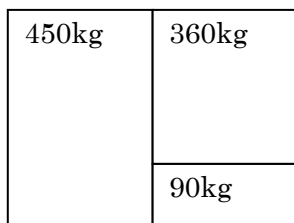
標準生産 BOX

②完成品は 360kg。仕損は 100kg だった。  
 A は 300kg 実際投入。実際単価は 10 円。  
 B は 160kg 実際投入。実際単価は 5 円

もし、月初・月末あれば書くだけ。  
 投入量の計算できればいいのです。



標準減損率通りなら

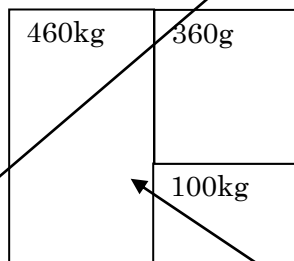


A 337.5

B 112.5

450

実際投入量を配合比率にすると



345

115

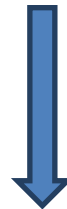
460

実際データ

300

160

460



数量差異計 262.5

数量差異計 △237.5

まず、右側の実際の A, B 300,160 と合計書く

次に、実際の投入量を標準比率で計算したものを真ん中に書く

最後に、左側の合計 (完成量から標準投入計算=450) 書く。標準割合で計算

配合比率同じなので、投入量の差 (減損による差)

実際投入量を標準的な比率で計算したものと、実際配合の差

歩留差異を製品別に計算しても、あまり意味ない。配合差異の計算がメインと考えましょう

<参考>

余力があれば押さえてください。試験で出た場合は、最後の2点分という感じです。

問題で、材料全体の平均単価（加重平均といいます）は6.5円（1kgあたり）です。

という事は、6.5円より高い材料（この場合A）をたくさん使うと配合上は不利、6.5円より安い材料（この場合はB）をたくさん使うと配合上は有利になります。

この観点でBOX書いてみましょう

A材料

@10	価格差異 $\Delta 900$		
@7		配合差異 18.75	@6.5（6.5円より高い材料をあまり使わなかったので <b>有利</b> ）
		歩留差異 243.75 ←	（数量差異 $<37.5 \times 7> - 18.75$ ） 差額の概念
	337.5 kg	300 kg	

B材料

@5	価格差異 0		
@5		配合差異 71.25	@6.5（6.5円より安い材料をたくさん使ったので <b>有利</b> ）
		歩留差異 $\Delta 308.75$ ←	（数量差異 $<\Delta 47.5 \times 5 - 71.25$ ）
	112.5 kg	160 kg	

要は「より安価な材料を沢山使った場合は、高価な材料を標準より少なく使用したので、会社全体で考えると有利」という意味です。

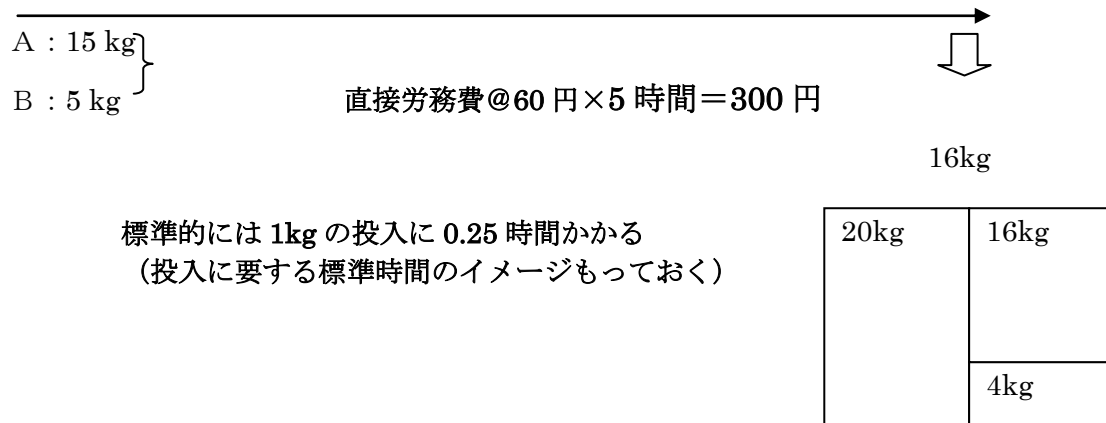
このパターンで問われた時にBOXを横に切るイメージ思い出せば、+2点取ってください

## 最後に能率差異と歩留差異の問題

<例題>

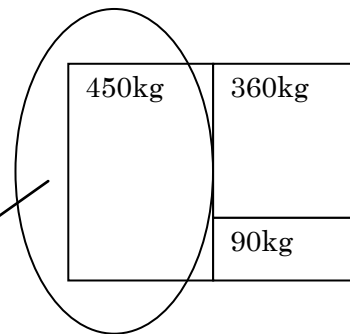
先程の図と同じように考えてみよう

①図にすると「こんな感じ」です



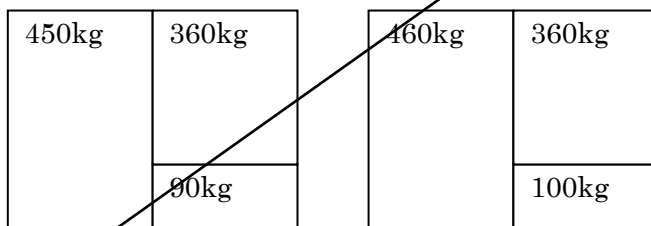
②問題文の標準生産BOXを考えると

でも実際生産データでは仕損 100Kg



③標準減損率通りなら

④実際投入量での標準時間は



労働歩留差異 (△150)      労働能率差異 (△300)

450×0.25h=112.5h      460×0.25h=115 h      実際時間は 120H

減損量により標準時間が増えている (減損による差異)

実際投入量での標準時間と実際時間の差 (能率の差)

日商1級 第132回にチャレンジして下さい(30分)

ダウンロード講座で解説します

古い問題持っている方は、全経153回は問1～問5で84点とれる可能性あり(ほぼ2級の知識)

<参考>講座では説明しておりません。各自でご確認下さい。

かなり余力がある人は押さえてください。試験で出た場合は、最後の2点分という感じです。  
時間差異を別の角度から分析します

原価標準（直接労務費）の内訳を考えてみました

ベテラン工員	@70円×3時間	=210円
見習い工員	@45円×2時間	=90円
合計	5時間	300円

当月の実際原価（価格差異はないものとする）

直接労務費

ベテラン工員	@70円×75時間	=5,250円
見習い工員	@45円×45時間	=2,025円

ベテラン工員と見習い工員の時間配分が事前に決まっていると考えます（材料の配合と同じ概念）

